

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370932

研究課題名(和文) フィールドノート・アーカイブズの基礎的研究

研究課題名(英文) Elementary study of the field note archives

研究代表者

中野 泰 (NAKANO, Yasushi)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20323222

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：1. 民俗学者桜田勝徳の調査研究資料の目録を作成し、このアーカイブが、柳田国男の薫陶を受け、民俗学を实践し始めた以降の資料が中心であることを明らかにした。2. 桜田のフィールドノートの検討から、その記載形式に一貫性(右面に記載し、左面を補助的に利用)とともに変化(日次、立て横書き等)があること、彼のフィールドワークには2つのスタイルがあること、フィールドノートとフィールドワークの変化は、共に1940年代に認められることが分かった。3. GHQ下の社会調査において、桜田がGHQの改革案を指示する立場で働き掛けていた事実を明らかにし、このようなフィールドワークに関わる実践の民俗学的な意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：1. The materials for investigation and research which folklore researcher Sakurada Katsunori had collected, have been organized, and come to resemble research catalogues. 2. We examined his field notes and his fieldwork, and revealed characteristics of them. We elucidated two types of the fieldwork through his field notes. And also we brought out the change of the compilation points of his field notes. We can recognize the changes either fieldwork and also field note are happened during 1940's. 3. It was found the fact that Sakurada worked on GHQ in favor of the plan for reform made by GHQ, and the research representative discussed the significance of these folkloristics practices.

研究分野：民俗学

キーワード：フィールドノート フィールドワーク 社会調査 アーカイブズ 民俗学者 桜田勝徳 実践

1. 研究開始当初の背景

実社会における学問の存在意義が深刻に問い直され、民俗学においても、その営為を社会的実践として再定位する試みが始められている。例えば、自然・人為的災害の勃発に対する文化財を中心とする対応、環境や福祉に関わる市民運動やボランティア活動の関係性、アメリカで形成された公共民俗学の導入、などである(加藤幸治『フィールドワークとしての文化財レスキュー：現状から次のフェーズにむけて』、『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集』、3、2012年、山下裕作『実践の民俗学：現代日本の中山間地域問題と「農村伝承」』農山漁村文化協会、2008年、六車由実『驚きの介護民俗学』医学書院、2012年、菅豊『現代アメリカ民俗学の現状と課題 公共民俗学(Public Folklore)を中心に』、『日本民俗学』263、2010年)。これらの研究展開は、様々な社会問題を取り上げる過程で現代社会へ実践的に対峙し、既存の学的立場と異なる次元から、新たな領域を創出しようとしている点で、重要な位置を占めている。しかしながら、その試みがなされる重要な立脚点の1つは、民俗学者の既存の営み自体の整理と批判に基づく必要がある。

ところが、フィールドワークを手法とする人文社会学的営為は、政治権力と無縁でない。この点は、文化人類学において世界的規模で批判されている(Sanjek, R.(ed.) *Fieldnotes: The Makings of Anthropology*. Cornell University Press, 1990.)。フィールドノートを含むアーカイブズの整備は欧米の各所蔵機関で進んでおり、例えば、ルース・ベネディクトのノートや書簡類は、Vassar College 図書館に所蔵され、希望者は閲覧できる。このアーカイブズによって、戦時下の調査研究の実態は大きく解明されている(ポーリン・ケント「コンフリクトの中から誕生した『菊と刀』」、北原淳編『紛争解決 グローバル化・地域・文化』ミネルヴァ書房、2010年、Janssens, Rudolf V.A. "Toilet training, shame and the influence of alien cultures, Cultural anthropologists and American policy making for postwar Japan 1944-1945", in *Anthropology and Colonialism in Asia and Oceania*. edited by Jan Van Bremen and Akitoshi Shimizu, Curzon.1999.)。アメリカではフィールドノート・アーカイブズの基盤が整っており、フィールドノートの再検証に基づき、社会との関わりで学問を批判的に捉え返す実証的研究が大きく進展しているのである。

しかし、民俗学はこれらの議論から脱落している。例えば、多くの民俗学者が占領下のGHQで行われた社会調査へ参与した点については検討されることなく、今日に至っている(福田アジオ『日本の民俗学 「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館、2009年)。民俗学者による被占領下の政策への参与という重要な問題ですら、検証されていないのであ

る。この理由として最も重要な点は、フィールドワークの実態を検証するための環境が整っていないことにある。民俗学におけるこの点は、欧米に比して、取り残された大きな問題となっている。

例えば、宮本常一や瀬川清子といった卓越したフィールドワーカーについての社会的実践を明らかにする研究は、個人研究者による長年の努力に委ねられている(岡田照子編『瀬川清子 女性民俗学者の軌跡』岩田書院、2012年)。民俗学者の調査研究資料は公開・閲覧において一般に制限があり、調査ノートの公開も一部に限られ、全貌が未解明のままであるからだ(cf.『宮本常一 農漁村探訪録』1、周防大島文化交流センター、2005-)。以上のような基盤構築を行わないまま、実社会に対する学問の存在意義を新たに措定しようとする営みは、従って、必ずしも、十分な学問の営為とは言えない。すなわち、そのような営為を確かなものにするために、民俗学者アーカイブズを体系的に整備し、それに基づき批判的検証を進めることが重要な課題となっているのである。

2. 研究の目的

本研究は、以下の3点を研究目的とする。民俗学者桜田勝徳の調査研究資料(慶應義塾大学文学部古文書室蔵)を対象に、詳細な資料目録を作成して公開に供すること、遺族の聞き取りと、資料の保存・利用形態、資料内容の調査を行い、アーカイブズの全体構造(性格と特徴)を解明すること、占領期を中心とする代表的フィールドワークの地へ現地調査と関係資料調査、及び、桜田の関係者へ聞き取りを実施し、社会的実践という観点から桜田によるフィールドワークの意義について検討すること、である。

3. 研究の方法

研究の方法は、以下の3点に整理できる。(1)民俗学者桜田勝徳の調査研究資料群の詳細な資料目録を作成し、第三者の利用・活用の便宜に供するよう公開する。(2)遺族・関係者の聞き取り、及び、各資料の形式や保存状態の分析を通じて、資料の記録・作成から執筆・編纂、保存管理に至る研究の一連の流れを考察し、アーカイブズの観点から資料群の全体構造(性格と特徴)の解明をする。(3)代表的フィールドワークの地へ現地調査と関係資料調査を実施し、フィールドワークの方法と意義について社会的実践の観点から検討する。

4. 研究成果

(1)民俗学者桜田勝徳の調査研究資料の写真撮影に基づき、資料の読み取りを進め、平行して、桜田勝徳の遺族に対してインタビューを実施した。この資料については目録(総目録、形態別目録)を作成し、アーカイブヤ

桜田のフィールドノートの特徴、フィールドワークの意義について検討し、報告書を作成した。報告書の構成は、目録編、論考編、資料編の3部で構成されている。その詳細は、以下の通りである。

【目録編】

1. 仮総目録(pp.1-8)
2. 形態別仮目録ノート(pp.9-30)
3. 形態別仮目録バインダー(pp.31-37)
4. 形態別仮目録風呂敷(pp.38-48)
5. 形態別仮目録封筒(pp.49-58)
6. 形態別仮目録雑(pp.59-61)

【論考編】

中野泰「解題 桜田勝徳調査研究資料アーカイブ」(pp.63-81)

足立泰紀「桜田勝徳の学問形成に関する一考察 柳田國男との邂逅と「事業研究」」(pp.83-89)

渡瀬綾乃「大福帳「甌島紀行」にみる桜田勝徳のフィールドワーク」(pp.91-99)

辻本侑生「フィールドノート・アーカイブズからみる『美濃徳山村民俗誌』の作成過程」(pp.101-108)

中野泰「GHQ時代のフィールドノートとフィールドワーク 漁村調査を中心に」(pp.109-126)

林圭史「「物」を見る眼 資料収集方法との関わりから」(pp.127-134)

【資料編】

「資料 桜田勝徳年譜：フィールドワーク・ノート・著作」(pp.135-142)

完成した目録については、桜田勝徳調査研究資料を所蔵している慶應義塾大学文学部古文書室のWebページでも公開されている(<http://kmj.flet.keio.ac.jp/material/sakurada.pdf>)。

本アーカイブについて行った研究成果は、以下の5点に整理できる。

総目録は、総件数225件となった。この内訳は、形態別目録として整理した。形態別仮目録は、ノート、バインダー、風呂敷、封筒、雑の5種で構成され、各々、118件、36件、9件、38件、24件となった。

このアーカイブ全体の特徴については、収蔵資料の性格、及び、時代的性格の2点から整理した。収蔵資料の性格から見ると、物質資料と写真資料を大きく欠いていることが分かり、手書き資料と印刷資料で構成されていることが分かった。時代的性格から見てみると、民俗学を志す以前の青年期の著述物を欠いていることが分かった。つまり、柳田國男の薫陶を受け、民俗学を実践し始めた以降の資料が中心となっており、文字資料が大半を占めているという特徴が認められる。

文字資料のうち、ノート類が118件と多くを占め、本アーカイブの1つの特徴となっている。118件(160冊)にのぼるノート類を分類すると、資料ノート88冊、フィールドノート61冊、学務ノート12冊、自伝ノート2件(7冊)となる。桜田勝徳が行った全てのフ

ィールドワークのノートが収蔵されているわけではなく、欠けているノートも少なくないことが分かった。とはいえ、フィールドノートの中には、良く知られる大福帳と称する和綴りのノートも含まれ、桜田の初期から晩年に至るフィールドワークの大半の記録が収蔵されていることが判明した。

バインダー類は、一次資料を整序させたり、文章化したりする中で編冊される形態である。封筒は、一次資料を整序させる段階で用いられた資料(情報)カードをまとめ、関連資料等を封入したものである。風呂敷は、ノート、バインダー、封筒を、なんらかの目的でまとめた形態である。雑は、僅かな物質資料その他である。このような資料形態は、桜田勝徳自身による資料整理や活用方法を反映していることが明らかになった。例えば、ノート、バインダー、文章等にはタイトルを付し、著述の過程でそのタイトルを引用したりすることで、使いやすいアーカイブの構築を意識していたことが明かとなった。

(2) 桜田勝徳の遺族に対してインタビューを実施するとともに、各種のフィールドノートを検討することで、桜田勝徳のフィールドワークの特徴と変化について検討した。

初期の桜田勝徳のフィールドワークは、先輩にあたる民俗学者の足跡に沿い、自らのフィールドワークを模索していたことが分かった。鹿児島県甌島のフィールドノートの検討から、桜田は、鳥類学者川口孫治郎の足跡を辿って話者を探索しつつ、その手法に限界を認め、自らがより良いフィールドと話者を探し、調査を展開していたことが明かとなった。

桜田の著名な民俗誌『美濃徳山村民俗誌』のフィールドノートの検討から、桜田が、フィールドワーク中に記したと思われるノートを、バインダーやその他に切り張りし、編冊していたことが分かった。フィールドノートを切り張りする手法で作成される民俗誌は、調査中の時系列的な資料のつながりを断絶させてしまうものである。桜田がどのような理由で行っていたのかまでは解明できなかったが、民俗誌の形成過程を明るみに出すことができた。

GHQ時代のフィールドノートの検討から、漁村調査のそれは、必ずしも、日付順に記載されておらず、開始して頁をめくる向きが二転するなど、やや混乱した記載形式となっていることが分かった。その理由が、GHQの社会調査における調査方法(世論調査)と関連するものであろうこと、混乱がありながらも、日次順で記載される傾向が失われているわけではないことが分かり、却って、そうした日付順の記載内容に、フィールドワークの背景を窺わせる記録が少なくない点が明らかになった。

桜田のフィールドワークには、2つのタイプがあることが判明した。一つは、各地を移動しつつ、滞在した地点で民俗調査を試みる

スタイルである。もう一つは、特定の地に一定期間滞在し、その地の民俗調査のみを試みるスタイルである。このスタイル間の変化については、前者が1930年代に卓越して認められ、後者は1940年代以降に現れてくることが分かった。フィールドノートの記載形式もこれに対応し、前者は日次順に、後者は必ずしも日次形式に従わない例が少なくないことが明らかになった。また、縦書きから横書きへの移行も1940年代に認められることが分かった。とはいえ、頁の利用方法としては、片面に記載し、もう片面を補助的事項の書き込みに利用する形式は生涯を通じて一貫していた。このようにフィールドノートの形式の変化と一貫性が明かとなったことで、桜田勝徳が実施したフィールドワークの歴史的な画期が1940年代に頃にあったことが浮き彫りになった。

桜田勝徳という民俗学者のフィールドワークの社会的意義について、実践という観点から検討した。本アーカイブズには、GHQで行われた戦後の社会調査に関わる資料が多数含まれていることが分かった。これらの調査には、桜田勝徳をはじめ、少なからぬ人文社会系の学者(民俗学、社会学、地理学、文化人類学)が参加していた。本アーカイブズには、国立国会図書館憲政室所蔵のGHQ資料にも含まれていない、社会調査のフィールドノートをはじめ、各種資料、ドラフトが多数認められ、例えば、GHQの一部局である天然資源局に対して行われたと考えられる「意見」(批判的な提言)を記した文書も含まれていることが明かとなった(「天然資源局ノ漁業制度改革案二対スル意見ノ附記」)。この提言文書は、戦後、農林省が進める漁業法改革について、GHQが介入してその改革方向の主導権を握ろうとする中で桜田によって自発的に作成された文書であることが分かった。政治と研究の狭間で行われたこのような民俗学者の営みについては、これまでその存在自体知られることが無く、民俗学者のフィールドワークに潜む政治性を検討する機会を斯学は持つことが無かった。しかし、このアーカイブの検討により、以上のような民俗学者の実践の問題点や課題点を議論する場を得ることができた。

以上、本課題についての調査研究によって、民俗学者が、このような高度な政治的時空間でフィールドワークをどのように行い、その営みがいかなる意味を有していたかについて、持続的に検討できる場を斯学に提供しつつ、その口火を切る検討成果を挙げることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

林圭史、桜田勝徳の技術伝承観と水産資料の収集方法に関する一考察 - 慶応義塾大学所蔵「桜田勝徳調査資料」の検討を通して -、史境、査読なし、66号、2013、62-81
〔学会発表〕(計 1件)

辻本侑生、越美山地における焼畑の禁止と地域社会 過去の民俗誌データの二次分析から、日本民俗学会、2015.10/12. 関西学院大学、西宮上ヶ原キャンパス(兵庫県西宮市)

〔図書〕(計 2件)

中野泰著、破壊と再生の歴史・人類学(山澤学・伊藤純郎編、山澤学他 8名の共著)、筑波大学出版会、担当部分：知識人の実践からみる日本社会の「再生」 民俗学者による参与の批判的考察、印刷中(2016 予定)

中野泰編、足立泰紀・辻本侑生・中野泰・林圭史・渡瀬綾乃共著、フィールドノート・アーカイブズの基礎的研究、株式会社石崎印刷、2016、1-142

〔その他〕

ホームページ等

慶応義塾大学文学部古文書室・桜田勝徳調査研究資料「仮目録」
(<http://kmj.flet.keio.ac.jp/material/sakurada.pdf>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 泰 (NAKANO, Yasushi)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：20323222

(2) 研究分担者

足立 泰紀 (ADACHI, Yasunori)
神戸医療福祉大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：30269922

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

林 圭史 (HAYASHI, Keishi)
公益財団法人常陽文藝センター・
「伝統文化・発掘継承事業」研究員
渡瀬 綾乃 (WATASE, Ayano)
筑波大学・人文科学研究科・
大学院生
辻本 侑生 (TSUJIMOTO, Yuki)
浜銀総合研究所・研究員